

粕谷宏紀校

萬代狂歌集

上

古典文庫

粕谷宏紀校

糸代狂歌集

上

古典文庫

古典文庫 第三〇五冊

昭和四十七年十月二十日印刷発行

非売品

集歌狂代万
上

校者 粕谷 宏紀

発行者 吉田 幸一

東京都杉並区和田一―一四―一三
印刷者 共立印刷株式会社

発行所

114 東京都北区西ヶ原
三―三四―一二

古 典 文 庫

振替口座東京一四五九七番
電話(九一〇)二七一七番

凡 例

一、底本として、初版本と目される文化九年角丸屋甚助板行の家蔵本を用いた。

二、校訂に際しては、できるだけ原本の体裁を伝えることにつとめたが、ただし漢字の字体は現行のものに直したところがある。片仮名の「ハ」はそのままとした。

三、丁数は裏移りは「 $\wedge$ 」 $\vee$ をもって示し、丁替りは「 $\wedge$ 」春二ウ $\vee$ のように示したが、序跋などの行替は底本のままではない。

四、繙読の便をはかって、序跋の句読点は私に補った。ただし、漢文の返り点、送り仮名は底本のままに従い、手を加えなかった。

五、『万代狂歌集』には、初版本より三首多い歌を持つ異本が存在するが、その三首も本書に収録した。右肩に※印をもって示した歌がそれである。

六、検索の便を考えて、歌の頭に歌番号を付け、下の巻末に作者別索引を付した。

七、本書の刊行に当って、浜田義一郎先生の御厚情に対して、また何かとご協力いただいた大沢美夫氏に深く感謝する次第である。

粕谷宏紀

解 説

一、書 誌

詳しいことは本文が語ってくれると思うので、ここでは簡単に記すことにする。

半紙本六卷四冊。宿屋飯盛撰。自序および大田蜀山人序。塵外樓清澄跋。文化九年（一八一二）、江戸角丸屋甚助板行。

二、諸 本

本書は刊行以来、好評をもって広く世間に受け入れられたとみえ、五種の異本が存在する。このことについて簡単にふれることにする。

異本は歌数から二系統に大別できる。すなわち、

イ 初版本系統（所収歌数二二〇九首）

ロ 後刷本系統（所収歌数二二二二首）である。

イ 初刷本系統

1 家藏本（本書に収録）

2 日比谷図書館加賀文庫藏本

題簽、刊記、序跋、本文丁数ともに家藏本に同じであるが、編次が初編上・初編下・二編上・二編下となっており、巻末広告に『雅言集覧』『源注余滴』『通俗排悶録』の予告を載せている。

ロ 後刷本系統

1 東京大学国文学研究室藏本・東北大学狩野文庫藏本

文化十癸酉年秋新板の刊記をもつ。板元は角丸屋甚助である。本文丁数、序跋は家藏本に同じであるが、表紙の色が濃青で、編次が一、二、三、四となっている。

2 浜田義一郎氏蔵本

東大、東北大本と同体裁であるが、刊記板元名を欠く。しかし、卷末に「江戸書林衆星閣蔵板目録」を有するところから、角丸屋甚助板であることは明らかである。

3 慶応義塾大学図書館蔵本（野崎左文旧蔵本）

本書は東大、東北大本と同体裁であるが、広告、刊記を欠く。一冊目見返しに「六樹園飯盛撰 塵外楼清澄校 万代狂歌集 東都衆星閣蔵」とあり、卷末に「京都・出雲寺文次郎、脇村治右衛門、江戸・須原屋茂兵衛、出雲寺万次郎、岡田屋嘉七、大坂・河内屋喜兵衛、秋田屋太右衛門」らの書肆が連記されている。本書は『万代狂歌集』の諸本中で、最後に板行されたものと思われる。すなわち、刷りが悪いこともあるが、文政十二年前後に板元である角丸屋甚助が没し、天保に入ってから角丸屋は衰退してしまい、多量の板木が他の書肆に譲り渡されているからである（『物之本江戸作者部類』）。

本書もこのような事情から、前出の七軒のいずれかに板木が渡り、角丸屋の蔵板目録をけずって、三都から出版されたものであろう。

三、刊年について

本書の刊年については従来二説がある。すなわち、菅竹浦著『近世狂歌史』（昭和十一年・日新書院）、同氏著『狂歌書目集成』（昭和十一年・星野書店）の文化八年須原屋茂兵衛刊説、『新訂増補日本文学史―年表総説』（昭和三十九年・至文堂）の文化十年説（板元については記事がない）の二つである。

私はこれら二説には従いがたく、本書を「文化九年角丸屋甚助板行」とするものである。すなわち、江戸中期以後における、江戸出版書肆の開板販売認可の公的記録簿（『享保以後江戸出版書目』未刊国文資料別巻・昭和三十七年）が残っているが、同書の文化九年の項に「万代狂歌集 全四冊 墨付百八十三丁 文化九申六月 六樹園著 板元売出 角丸屋甚助」という記事がある。

この意味は、角丸屋甚助から書肆組合に提出された『万代狂歌集』の草稿を

組合の月行事が吟味し、その後角丸屋が板下にかかり、奥書、序跋が全部完成して、角丸屋が改めて月行事に提出して、文化九年六月に販売許可がおりたということである。そして三カ月ばかり経て出版されたのである。

これは公文書の記事であるから信用できうる。前記、菅説はどういう根拠によったものか不明あるが、私の管見では「文化八年須原屋茂兵衛板」の書は存在しない。また文化十年説は東大国文研究室本によったものと思われる。

四、成　　立

本書の成立は清澄（飯盛の長男）の跋文に「この書のはじめ、おのれおもひたちて、あまねく此頃のすき人の歌どもあつめ置たるを、親なる人のもとにもちゆきてとりえらばせけるに、かくてはたらず。翁がわかかりし頃の友だちのうたこそおかしけれ。これとりくはへけんとして、くしげの中よりとり出て、これかれとえりひろひてかきくはへてこひつ（中略）。」とあるように、飯盛と清澄の撰にかかるものである。

このように跋文では、親子が共撰したような感をうけるが、実際には飯盛自身が編纂に当たっている。それは本書に飯盛の意向が強く打ち出されているからである。その表われの一つとして「翁がわかかりし頃、友だちのうたこそおかしけれ。これとりくへはんとて、くしげの中よりとり出て……」と跋文にあるように、飯盛の若い頃（天明・寛政期）、活躍していた狂歌作者たちの作品を集めている。このことは、いいかえれば飯盛が常に主張してやまなかった「天明狂歌が狂歌の真髓」であることを本書において具体的に示そうとしているのである。これについては文化、文政期における狂歌界の状況と密接な関係があるので後述する。

さて、『万代狂歌集』という書名であるが、「これ続万載集とやよびけんと思ひつるを、続の字なとかうむらせんは、なにとやらんかしこき撰集の名にかよひて、はばかりべきこちすなり。ただ亀の尾のながき世につたへてつきぬいはほのためしこそ、ねがはまほしけれとて、万代集とはなづけ給ひき」と跋

文にあるように明らかである。ここで注意を引くことは、本書の書名を「続万載集」にしようとしたことである。これは前述したような飯盛の主張が、清澄の跋文を通して、ここにも示されているとみてよいであろう、すなわち、江戸狂歌の黄金時代をもたらした、いわゆる天明調のさきがけともなった『万載狂歌集』（四方赤良編・天明三年刊）の精神を踏襲しようとする飯盛の真情が吐露されているのである。このような飯盛の狂歌に対する態度の結集ともいうべきものが『万代狂歌集』であったといえよう。

本書の刊行が文化九年秋であることは、すでに明らかにしたが、編纂の終わった時期はいつであろうか。四方赤良が「さつき十一日裏住身まかりぬと聞て」（雑部五十ウ）という題詞で「長櫃と思ひし物を重箱のお萩となりぬ秋もこぬ間に」なる歌を作っている。これは天明以来の狂歌作者であった大屋裏住（本名 久須見孫左衛門）の死を悼んで、赤良が詠んだのであるが、大屋裏住が没したのは、文化七年五月十一日（享年七十七才）であった。この歌が本書に収載さ

れている歌のうち、作歌時期がはっきりしているものの、一番新しいものであるから、本書が編纂されたのは文化七年末から文化八年にかけてであったと推定したい。

五、『万代狂歌集』の性格

前述したように、本書は天明狂歌を継承しようとする飯盛の意図が織り込まれているが、同時に対立していた狂歌堂真顔側を意識して編まれた狂歌集でもあった。そこで作者の範囲を分析して本書の性格を述べてみたい。

本書に所収されている作者は三二四名の多きを数えるが、これらすべてが飯盛側の者とはいえないのである。そこで飯盛側の狂歌集、狂歌評判記によって説明をしたい。参考資料として使用するこれらの書は次の通りであるが、『万代狂歌集』が刊行された文化九年を下限として、上限を飯盛が狂歌の著述を再開した文化五年とした。

△参考資料▽

○狂歌評判記（別名 評判筆果報）文化五年刊・飯盛判・所収作者二四九人

○新撰狂歌百人一首 文化六年刊・飯盛編・所収作者一〇〇人

○春興帳 文化七年刊・飯盛撰・所収作者二八三人

○狂歌評判記 文化八年刊・飯盛判・所収作者二二四人

○狂歌画像作者部類 文化八年刊・飯盛編・所収作者二二四人

左記の五種の書に記載された作者たちは、一応飯盛側の判者や作者又は同調者として理解してよいであろう。特に『新撰狂歌百人一首』『狂歌画像作者部類』において、肖像入で記載された人々は飯盛側の判者及び作者とみてよいであろう。以上のことから勘案すると『万代狂歌集』中の作者たちの約六八％に当る二二二人が飯盛側の判者及び作者である。

つぎに天明狂歌時代の作者はどの程度に本書に収録されているかみたい。そこで同時代の代表的狂歌集、狂歌評判記の

『狂歌若葉集』（唐衣橘洲編・天明三年）

『徳和歌後万載集』（四方赤良編・天明五年）

『万載狂歌集』（四方赤良編・天明三年）

『故混馬鹿集』（狂言鶯蛙集ともいう。朱楽菅江編・天明五年）

『狂歌才蔵集』（四方赤良編・天明七年）

『狂歌知足振』（普栗釣方編・天明三年）

『狂歌師細見』（平秩東作編・天明四年）

『狂歌俳優風』（唐衣橘洲、朱楽菅江、四方赤良判・天明五年）

『狂歌鱗』（式亭三馬撰・享和三年）

などを参考に調査してみると、三二四人のうち、約二二%の七〇人がこれらの書に所収されている。ただし、これらの人たちが天明狂歌時代に活躍した人々とはいえず、まだ有力な作者、判者たちがぬけている。いま思いつくまま名を記すと、浜辺黒人、手柄岡持、算木有政、酒上不埒、大根太木、普栗釣方、

尻焼猿人、飛塵馬蹄、土師搔安、小川町住、花江戸住らがある。このように一部の者がぬけているとはいえ、天明狂歌時代のリーダーか、有力な作者を網羅しているといってもよいであろう。

『万代狂歌集』は以上のように、天明狂歌時代の作者や飯盛側の人たちによって占められているが、飯盛と対立している鹿都部真顔（四方真顔）側の判者及び作者も若干収録されている。このことは、川柳の場合と同じように、他のグループの場合の者が拘束されずに自由に参加できたことや、『万代狂歌集』が天明狂歌の精神を継承していることを考え合せると、真顔側に属していることについては、それほど神経質にはなっていないようである。ちなみに『万代狂歌集』と同時代に出版された真顔側の若干の狂歌集、狂歌書によって作者名を記してみると、

まず真顔側の判者を列挙した『俳諧歌麈』（式亭三馬編・文化十三年）には、芝のや山陽、桃本雛丸、森羅万象（二世）、宇和空風

『俳諧歌老若百首』（真顔編・文政六年）には、

森羅万象（二世）、可才寮仲住、河井物梁、故屋雨盛、後為俊、菖蒲仲住、垣視人真似

『俳諧歌相撲長』（真顔撰・文政二年）には、

紀平佐丸、桃原園丸、後為俊、芦辺田鶴丸、祭和樽、琴通舎英賀、佐屋裏襟、豊年雪丸、短冊布女、河原鮒待、宇和空風、森羅万象（二世）

『俳諧歌森廼下風』（真顔、万象ら共撰・文化年間）には、

籬菊丸、瓢花盛、娛面堂奈か羅

『俳諧古今雛歌集』（真顔撰・文化年間）には、

上書此主、河井物梁、四海雄佐丸、森羅万象（二世）、長糸楼琴成

らの名がみられる。

これらの人たちは、いま例に示したように、真顔側にも名を連ねている、当時の第一線級の作者や判者たちである。この事実はいま述べられているように、